

鎮魂の夏である。お盆、灯籠流し、終戦の日…彼岸と此岸を往き来して、普段よりさらに強く亡き人々の魂を体を感じながら暮らしている。

酷暑の中、西日本豪雨から1カ月が過ぎた。悲しみとともに、被災者支援態勢の強化、復旧復興を進めているが、ボランティアの方々も延べ10万人もが現地入りして働いてくださっている。感謝いっぱいである。

私は4年前から1年余り国家公安委員長、防災担当大臣の任にあり、自衛隊、警察、消防、ボランティアの皆さまとともに広島の土砂災害、鬼怒川の堤防決壊、御嶽山、口永良部島の噴火、長野の地震、四国の豪雪対応に当たった。日本はさまざま

な災害に遭いやすい国である。

防災、減災に世界で最も取り組んでいるが、それでも自然災害の激甚化、局地化、頻発化はすさまじい。そんな中、ここにこそ数年、自助、共助、公助の連携のレベルが上がってきている。

今回の西日本豪雨では最初の1週間は地元の中・高校生が泥のかき出し、家屋の片付けに奮闘してくれた。その後は全国から青壮年が入り、どれほど人々、高齢者の心を希望の方向へと向けてくれたことだろう。高度な専門の実力集団である自衛隊、警察、消防の方々とそれぞれ持ち味を発揮して復旧に当たるときには日本の底力を感じる。

参院議員 山谷えり子



〈やまたに・えりこ〉サンケイリビング新聞編集長、国務大臣（国家公安委員長・拉致問題担当相）など歴任。1男2女の母。

今や日本の防災対応は世界トップで、3年前に仙台で開かれた国連の防災世界会議は25カ国の首脳と100カ国以上の閣僚、延べ15万人が出席する過去最大級となった。私は議長を務めたが、安倍晋三首相は向こう15年間災害により失われる生命、財産を減らすため、日本は経験を生かした技術、防災教育、財政支援など、各国の要請に応じて支援する「仙台宣言」を発した。これからも防災教育

6・2%が養父によるもので、虐待防止連携のための要保護児童対策地域協議会も各地で運用差が大きい。子供を守る網の目を密にしていかなければならない。父性、母性は子と触れ合うことで育てられていくものである。親であることの崇高な使命に光を当てなければ、父性、母性軽視の風潮と社会の育児力の低下は止まらない。現在、教育の場では乳幼児と触れ合う時間作りを進めている。中学校家庭

鎮魂の夏、心に刻む

を進め、非常時の生き方、サバイバル技術力を高め、若い力、強い心をいただいて、社会の強靱化を進めたい。

また、社会の強靱化という点からは、ゆるしていただきたいとノートにつづって亡くなった5歳の船戸結愛ちゃんの生命を無駄にしないといけないと考える。

現在、警察、厚生労働省、地方議員らと児童虐待の実態把握と施策強化に努めている。日本小児科学会の推計では虐待で亡くなる子供は年間約350人。ほぼ1日に1人という痛ましい数字になる。平成28年度の虐待相談は12万2575件と過去最多となっている。虐待者の48・5%が実母、38・9%が実父、

分野の学習指導要領では「子どもが育つ環境としての家族の役割について理解すること」「幼児と触れ合うなどの活動を通して、幼児への関心を深め、かわり方を工夫できること」と記されている。少子化と近所付き合いが減る中、体で愛を感じる教育の場を増やしたい。父性は養愛を育み、母性は慈愛を育む。子供を守り、徳の高い社会の成熟のためにも、取り組まねばならないことである。

「愛の反対は憎しみではなく無関心」と言われたのはマザー・テレサ。鎮魂の夏に、苦しみ、悲しみを心に刻み、実践的教育の予算の充実が成るよう関係者の声をまとめたい。

■ 解答乱麻 ■